
英語でコミュニケーションが進んでできる生徒の育成

— 「パフォーマンスチャレンジ」を通して —

高橋 浩人

(児童生徒支援コース 10502005)

I 研究の目的

本研究は、「パフォーマンスチャレンジ」を軸にして、授業実践を積み重ねることで、生徒が英語でコミュニケーションが進んでできる授業モデルを創造することにある。授業を構想する際に、「パフォーマンスチャレンジ」を導入に、または展開に、または終末に、あるいは導入と展開に等、位置づけることにより、効果的で最適な授業となるよう考える。

II 「パフォーマンスチャレンジ」の定義

パフォーマンスという言葉には、「出しゃばる」という響きを感じ取る人が多い。ここでのパフォーマンスは、①「必要であたりまえの行動や態度」、②「相手と関わろうとする態度」と捉えた。また、佐藤綾子(1995)は、③「日常生活の自己表現」と言っている。

「パフォーマンスチャレンジ」は、造語である。物怖じせずに、「人との接点をつくらうとすること」、「新しいことに向かおうとすること」と捉えた。

III 研究主題設定の理由

現代社会は、コミュニケーションツールが目覚ましい発展を遂げている一方で、人間関係の希薄化、コミュニケーション不足から生ずる相互理解の不十分さで誤解を招くことがある。また個室化、個別化とその行動様式も他者との関わりを疎遠にさせ、共に行動を起こすことや共に何かをしようとするのが少ない。

このような社会にあつて、生徒が引込み思案で消極的な態度であるとするれば、変化の激しい現代社会や国際社会の中で、個人本来の持ち味を出せないことになる。人との関わりにおいては相互理解が促進せず、進化のない新しいことを切り開こうとしない停滞した社会となるであろう。

これから生徒が生き抜いていこうとしている彼らを取り巻く現代は、国境が低くなるグローバル化する社会の中で、新しいものに対応していく力や未知の人、未知なるものへの挑戦を通して、ますます生きる力が必要とされる。英語の教科の中でも、そういう力が発揮されなければならない。また、ここ数年間で国際化も進み、外国人が往来する機会も多くなり彼らと必然的に関わる頻度が増すことが考えられる。

そうなると、自分の考えを発信したり、相手の考えを受信しようとする姿勢や態度は、ごく日常の当たり前なことになり、日常生活の自己表現なくしては、相手との関わりが途絶えてしまう。コミュニケーションを自分と相手をつなぐ「道」とするならば、その道を進んで活かそうとする行為は、今後の日常生活の中においてますます必要とされると考える。子どもたちの生きる力を育むためには、言語力の育成は不可欠であり重要である。

研究主題設定の理由は、前述のような背景と以下の4点の視点で、パフォーマンスチャ

レンジを取り入れる必要性があると考えたからである。

①中学校新学習指導要領の実施にむけて

新学習指導要領中学校外国語科の目標において、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」が掲げられた。コミュニケーションの際には、物怖じせずに、「人との接点をつくること」、「新しいことに向かうこと」等、パフォーマンスチャレンジを必要としていることと一致していると言える。

②本校の実態（小中連携教育）

平成23年度から小学校では、外国語活動が完全実施された。外国語活動で育まれた素地の上に、中学校ではさらに生徒の「伝えたい」「相手を理解したい」等、表現の幅を広げたり深めたりする。身体言語的な外国語活動をパフォーマンスチャレンジに繋ぐことが求められる。

③生徒の実態から

学年が進むにつれて「英語が好き」である生徒が減少傾向にある。コミュニケーションが進んでできる生徒を育成するには、英語に興味や関心を抱かせ、好きにさせるパフォーマンスチャレンジを軸にした授業モデルの創造は必要である。

④緊急性（高等学校との関連において）

高等学校の新学習指導要領で、授業を実際のコミュニケーションの場面とするために、授業を英語で行うことを基本とすることが示された。中学校でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、高等学校への学習に繋げていくことになる。そういう点でもパフォーマンスチャレンジは必要である。

IV 研究の方法

研究の方法は、筆者が最適な授業をつくろうと（授業改善）することである。つまり、パフォーマンスチャレンジを軸とした授業実践を重ねていくことである。そのことが、最終的に年間の指導計画モデル（カリキュラム）を生成する。

V 実践の概要

筆者が研究を通して目指す生徒像は、適切な声量で、笑顔で、友だちや先生と目を合わせ、進んでコミュニケーションをする姿である。「間違いを恐れたり、正しく言えないので最初から試みようとしなない生徒」を、「人と関わろうとしたり、新しいことに向かおうとする姿勢や態度を持つ生徒」へ変容させることである。

そのためには筆者が、まず授業において生徒や ALT と英語でコミュニケーションを進んで行うという姿勢がまずは必要になる。そこには、指導者としての立場で正確な文法や適切な表現を心がけることを根底におきながらも、間違いを恐れない、身に付けたものはどんどん使用してみる姿勢や態度をもつことにした。また、授業実践における導入、展開、終末それぞれの場面、その時点で、生徒の様子や学習環境の雰囲気を感じ取り、その状況に対応して授業を展開するようにした。

また、英語科という教科の枠の中で英語という言葉を学ばせるために、年間指導計画に沿って、コミュニケーションを支えるための文構造や語彙等を教科用図書（以下教科書）を用いて系統的に指導を展開するだけでなく、「学習的に学習をしない」場面、その時、

その場面で最も話題性の高い事柄を題材にしたティーチャートーク、日本人教師と外国人教師間で行われるコミュニケーション、教師対生徒、生徒対生徒間で行われるコミュニケーションも取り入れた。中学校における英語学習の初期段階では、音声を重視し、文字による指導は、生徒の様子を鑑みて必要とされる最小限に留めるようにした。

筆者は、移行期間で実施された小学校での外国語活動の成果を受け継ぎ、パフォーマンスチャレンジを軸にした授業を展開することで、物怖じせずに、「人との接点をつくらうとすること」、「新しいことに向かおうとすること」を育むための授業実践の具体例のいくつかを示す。

VI 実践の具体例

①～「ハイバイカード」による基本表現の練習～（1年生）

Hi !と始まり、Bye と終わる、How are you doing ?と始まり Pretty good.で終わる対話形式の短い表現は、「ハイバイカード」と呼ばれるピクチャーカードであり、授業のウォームアップとして取り入れている。新学期から ALT との T.T 時に冒頭5分程度用いて、数枚から数十枚の継続させている活動である。枚数は全部で 96 枚ある。

ALT のあとに続いてのリピート練習、生徒が表現にあうジェスチャーを取り入れた身体的表現の練習、最後はジェスチャーなしでテンポを速くした表現練習を行った。

②-1～授業開きで自己紹介～（1年生）

4 月第 1 回目の授業開きでの実践である。筆者は、表情や声量、アイコンタクトやジェスチャーを意識して授業に臨んだ。生徒は小学校での外国語活動を経験している。それを受けて、「あいさつ」「自己紹介」「よろしくおねがいます」を互いに伝えあい、生徒同士が接点をつくらうとすることに留意した。筆者も活動に加わり、一人一人と握手をかわした。生徒同様に、筆者自身もパフォーマンスチャレンジ。

②-2～生徒の学習が進んでからの「自己紹介」～（1年生）

生徒は、ALT の前で自己紹介がどのようにしたら相手に伝わるかを考えさせ、発表をさせた。聞き役の ALT は Daily Conversation を取り入れた。発表の中でジェスチャーを用いたり、いいよどみがあっても最後の Thank you. まで伝えることを生徒に意識させた。

全員が自己紹介をし終えた後、ALT がフィードバックを行った。生徒が自己紹介で工夫していたことについて賞賛したり、改善されるとよい点を生徒へ丁寧に伝えた。

③～ALT の家族に質問してみよう～（1年生）

これは、三人称単数現在形の疑問文を運用する実践である。ALT の家族の写真を活用して、ALT へ質問を試みたり、その応答を聴き取ることをもって、よりリアリティーのある実践を展開した。このコミュニケーション活動を通して、生徒は直接的には面識のない ALT の家族（人）と接点をつくらうとすることや未知なる事柄に向かおうと試みた。

④～身近なバス路線図を用いた「道案内」～（1年生）

これは教科書における「道案内」のモデル文を、地域のバス路線図を用いてシチュエーションに現実味をもたせ、日常的な場面設定をした実践である。また、外国人旅行者と案内役のやりとりについて、文字化した資料を用いない活動を組み入れた。

このコミュニケーション活動では、生徒が一みなかみ町民として、「思いやりの心」や「おもてなしの心」に留意して、身体的な表現も取り入れながら道案内を行った。

「人と接点をつくらうとする」、「新しいことに向かおうとする」姿勢や態度を育てている生徒が、(外国人) 来訪者の求めに応じようとする姿勢や態度が表出できるならば、そこにパフォーマンスチャレンジの信念が根づいてきたといえると考えられる。

⑤～修学旅行でパフォーマンスチャレンジ～ (3年生)

奈良・京都への修学旅行前に、「修学旅行で他国の人と交流しよう!」というテーマを掲げ、パフォーマンスチャレンジに向かわせることをねらった実践をした。

修学旅行では、日頃の英語学習の成果を実際の場面で活用できる機会であり、通じる喜びだけでなく、実際の場面での想定されないイレギュラーな話しの進め方を通して、難しさも同時に体験できる。交流を通して未知の人と接点をつくり、会話を楽しみながら相手を理解しようとする新しいことに向かう姿勢が形成できる。

Ⅶ ALTとのT.Tの有効性

ALT との T.T の有効性として、以下のことが認められる。

① ALT は、生徒が英語で、物怖じせず人との接点をつくらうとしたり、新しいことに向かおうとしたりすることが実践できる身近な存在である。また、より日常生活に近い、リアリティーあるコミュニケーション活動を実現させてくれる。

② ALT は、「適切さ」「正確さ」「流暢さ」を伝える。場面や状況にあった適切で正確な表現は、まさにネイティブチェックにあたり、それが可能になる。また文化的な面において、生徒の未知なるものへの接点やかかわりを作ろうと導いてくれる。

③ ALT はコミュニケーションにおけるフィードバックを行う。生徒がパフォーマンスチャレンジの気概をもって ALT に対してコミュニケーションを試みたり、応答したりすると、その姿勢や態度に対して ALT の側から応答がある。それが、生徒に「上手に伝えられたか」あるいは「何か今ひとつ足りなさそうだ」等、次のパフォーマンスチャレンジに繋がる手応えを感じさせたり、改善箇所を考えさせたりする。

Ⅷ 授業実践から抽出された重要な要素

最適な授業を行うための重要な要素は、以下の7点であるといえる。

①授業によりリアリティーを持たせる (Ⅵの③④⑤参照)

生徒の生活のあり様に従って言語の使用場面を設定する。それが日常的な文脈に近づくことになり、より現実味を帯びた。

②耳で聞いたものをすぐに行動(表現)に利用する

音声を取り入れたときに、文字で確認せずに、直ちに行動や表現といった動作化させる活動に変えたところ、その後生徒同士の言語活動やコミュニケーション活動で滞る場面が減少した。

③リスニング時は、最初は焦点を与えずに聴かせる

リスニング時は、焦点を与えることでその箇所をより意識させることができた。しかし、焦点を与えたところは聴き取れる一方で、他の情報に意識が向かなかつたり、聴き取れないことがあった。最初焦点を与えずに聴かせることによって、幅広い情報を聴取しようとした。

④間違っても（完璧でなくとも）いいので英語で話してみる

筆者が授業における雰囲気として、間違いを恐れない、完璧でなくても伝えようとする姿勢や態度を示すことを大切にしてきたことで、男女隔たりなく恥ずかしがらず活動が行えたり、困っている生徒を助けられたりする生徒に変容してきている。

⑤常に身体的な表現の援用をする

表情や身振りを援用することで、自然な形で相手に伝えようとする姿勢や態度が具現化された。また表現が思い浮かばない咄嗟の場面でも表情や身振りが先行し、相手に伝えようとする姿勢や態度が少しずつ可能になってきた。

⑥コミュニケーション活動に繋がるスモールステップでの段階的な練習をする

コミュニケーションが進んで行えるように、まずは日本人教師と外国人教師でモデルを示し、その後日本人教師と生徒、外国人教師と生徒、生徒同士といったようにスモールステップでの段階的な練習を取り入れることで、より円滑なコミュニケーション活動とより積極的な態度が見られた。

⑦年間を通して行う活動を授業に位置づける

これまでの実践では、最適と思われる活動を単発的に組み入れ、それを数回継続させて終えてしまっていた。しかし、「ハイバイカード」に代表されるように、年間を通して行う活動を授業に位置づけることで学習活動のリズムができた。また、身体的な表現を援用するリズムカルでテンポのよい基本表現練習を積み重ねることができた。

⑧三方向コミュニケーション（教育工学の理論）を取り入れる

教師が配布プリントを差し出しながら Here you are.と生徒に手渡すと、Thank you.という返事が返ってくる。その返事に（生徒の気持ちや考え）対して、教師がもう一言（例えば、You're welcome.や Good luck.）付け加えることを意識して行った。三方向コミュニケーションの理論で KR と呼ばれるその部分が自然な形で行えるようにすることで、より現実のコミュニケーションに近いパフォーマンスを授業の中で経験させることができる。

IX 研究の成果と課題

○成果として

前述のように、「パフォーマンスチャレンジ」を軸にして、授業実践を積み重ねてきたことで、授業モデルが形成されつつある。そしてまた実践を重ねながら、指導内容を、形成されつつある授業モデルに適合させ、配列してきたことから、パフォーマンスチャレンジを軸にしたカリキュラムもまた生成されつつある。

○課題として

年間を通じた授業実践の積み重ねによって、パフォーマンスチャレンジを軸にしたより適切な授業モデルを構築し、そしてまたカリキュラムをも造り上げることが、今後への課題である。

参考文献

『小学校学習指導要領解説外国語活動編』文部科学省（平成 20 年 8 月）

『中学校学習指導要領解説外国語編』文部科学省（平成 20 年 9 月）

佐藤綾子『自分をどう表現するか パフォーマンス入門』講談社現代新書（平成 7 年 10 月）